

# 総合型選抜入学試験

〈出典一覧〉

心 理	消費者庁	「令和4年版消費者白書 令和3年度消費者政策の実施の状況 令和3年度消費者事故等に関する情報の集約及び分析の取りまとめ結果の報告」P.19より作成、一部改変
ビジネス	国土交通省	株式会社ドコモ・バイクシェア「シェアサイクルの現状と課題について」国土交通省シェアサイクルの在り方検討委員会 第2回配布資料2-4 2020年6月30日 一部改変
ビジネス	「日経ビジネス」2018年5月14日号	特集「「面倒くさい」を狙い撃て3大潮流を掴む新ヒットの方程式」一部改変
ビジネス	平野敦士カール、アンドレイ・ハギウ	『プラットフォーム戦略』 東洋経済新報社
会 フ	元村有希子	『科学のトリセツ』 毎日新聞出版
会 フ	日本経済新聞 2022年8月27日	「マイナポイントという愚策」(大機小機)
日 文	加賀野井秀一	『日本語を叱る!』 ちくま新書
歴 文	岡田温司	『黙示録ーイメージの源泉』 一部改変 岩波新書
初 教	文部科学省	『令和3年度学校基本調査』e-Stat(政府の統計窓口): <a href="https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&amp;toukei=00400001&amp;tstat=000001011528">https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&amp;toukei=00400001&amp;tstat=000001011528</a> から引用
安 全	環境省	「我が国の食品ロスの発生量の推移」 <a href="https://www.env.go.jp/content/000046525.pdf">https://www.env.go.jp/content/000046525.pdf</a> (2022年)より一部改変
会 フ	日本経済新聞 2022年4月3日	「金融を深く学ぶ環境整えよ」(社説)より抜粋

問題 次の文章は加賀野井秀一『日本語を叱る!』の一節である。この文章を読み、あとの問に答えなさい。

ところで、老婆心(いや老翁心)ながら申し上げておきたいのですが、私は日本語のなかに論理性を取りこもうと論じつつ、単に欧米的な論理の後追いをしているわけではありません。もちろん、欧米的な論理から学ぶべきものは、まだまだ山のようにあって、それを取り入れるのにやぶさかではないのですが、わが日本語にも、これを凌駕(りやう)するような見事な論理性がそなわっていることを忘れてはならないのです。

たとえば「なんとなく春めいてきたなあ」という日本語表現と、Spring has come. という英語表現とをくらべてみて、皆さんは、いったいどちらが季節の移り変わりをよくあらわしているとお感じになりますか。私はだんぜん日本語のほうがだとうと思います。こうした推移的なもの、生成的なもの、雰囲気的なものをあらわすには即物的な日本語表現のほうが理にかなっているんですね。これもひとつの論理です。

あるいはまた、外資系の企業で上司に報告するときでも考えてみてください。日本人社員が「うっかりこうなりました」などと言おうものなら、ごんごんとお小言をいたたくはめになるでしょう。「こうなりました」ではなく、あなたが「こうした」のだらう、と。つまり、このような表現は、欧米的な発想からすれば、責任をばかしたあいまいな言いかたのようにとられてしまうわけですね。

しかし、いまいち考えていただきたいのですが、現代社会の複雑なメカニズムのなかでは、個人が「こうした」のではなく、その意に反して、諸般の事情から「こうなりました」という場合も多いのではないのでしょうか。これまた、日本語のほうが、現代社会にふさわしい表現になるのかもしれない。

さきにもうひとつ、唐突な質問で恐縮ですが、手紙の宛名の書きかたは、はたして日本流と欧米流とはどちらがすぐれているのでしょうか。そう、私たちは「〇〇県」「〇〇市」「〇〇町」「〇〇丁目」「〇〇番地」というぐあい大きなテグリーからしだいに小さなものへと限定し、最後に個人の名前をもってきますが、欧米ではこれが逆になるというあの書きかたのことで、

私はまぎれもなく日本流が合理的だと思いますし、このことは、かの哲学者ジル・ドゥルーズをはじめとして、多くのフランスの先生や友人たちも認めておりました。

日本語の表現は、まさにこの宛名書きの形式に一致しています。ために、「日本では六月には雨が降る」という一文を考えてみましょう。まずこの表現は、「日本では」と言いつて、語るべき領域を提示し、この領域のなかで「六月」を限定し、さらに「六月」にかかわることのなかで「雨」を限定することによって、順次、その内実を語っていきます。つまり、日本語の論理のプロセスも、基本は宛名書きと同じく、大きなテグリーから次第に小さなものへと絞りこんでいくスタイルになっているのです。

このスタイルは、ひじょうに「探索的」で「発見的」だと言えましよう。なぜならそれは、私たちの内部で、はじめは漠然としていたものが次第に明らかになっていく知覚のプロセスを正確にたどっているからです。

最初は何もないところで、にわかにはひじょうの意味が姿をとりはじめる。それを私たちは「〜では」という表現で、かなり大きっぱな一領域として区画する。そしてこの領域がひとつ決まれば、今度はそこに「〜には」という表現があらわれてそれをさらに細かく限定する。この限定されたものは、さらに「〜が」によって限定されて……と、以下同文。最後には見事に彫琢(てうたく)された結論がえられるというわけです。

このような日本語の明確化の歩みは、「帰納的」で「協動的」なものとなりますが、欧米語の論理はどうでしょう。「AはBである。なぜなら、〜であり、〜であるからだ……」こうした論理は「既定的」「演繹的」「対立的」にならざるをえません。それはすでに「AはBである」と言ったところで勝負がついている。

結論は、それが正しいか誤っているか、二つ一つしかありません。つまり、このような欧米語の論理は、あらかじめ論者のなかで決着のついたことがらを戦わせるには好都合ですが、日本語のように、探索し、帰納し、協調して、不確かなものから徐々に結論を創造してゆく論理にはなりにくいものです。

その意味では日本語の論理の方が、じつははるかに「発見的」であり「創造的」であると言ったこともできるでしょう。私たちは、日本語を感情的なものから論理的なものに銜直(くはな)していくとともに、日本語そのものの論理から受けつぐべきものは受けついでいかねばなりません。

いかがでしょう。私たちの日本語が感情過多にならぬよう論理性を取り入れるということは、同時にまた、論理に温かい血をかよわせるといってもあるのです。

(加賀野井秀一『日本語を叱る!』ちくま新書 二〇〇六年)

問 (一)傍線部、「日本語の論理の方が、じつははるかに「発見的」であり「創造的」である」とはどういうことか。本文に即して説明しなさい。次に、(二)本文が述べる日本語の論理性について、あなたはどうか考えますか。意見を述べなさい。(一)と(二)をあわせて、八百字程度で答えなさい。

次の文章は、岡田温司『黙示録イメージの源泉』(岩波新書、二〇一四年)の一節である。本文を要約しなさい。その上で、メディアやテクノロジー(文書・イメージ、インターネット、SNSなど)による情報の利用についてのあなたの考えを、文中に記された以外の具体例(歴史上の事例、現代社会の事例、身近な例など)を必ず一つ挙げながら述べなさい。なお、全体の解答は八〇〇字以内にする。

一九九〇年のイラク軍によるクウェート攻撃と、翌年の多国籍軍によるイラク空爆に端を発する湾岸戦争は、史上はじめてのヴァーチャル戦争とも呼ばれた。そこでは、最先端のテクノロジーを駆使した迅速な情報収集と画像分析が勝敗のカギを握る。何より重視されるのは速度とイメージである。ポール・ヴィリリオ。同じ著者はまた以下のようにも述べている。戦争は、人の眼を欺く見せ物と切り離せない。[中略]敵を倒すというのは、相手を倒すというよりもむしろ相手を威圧することであり、死の手前であつて相手に死を体験させることなのである。それゆえ、「演技行動を欠いた戦争などありえないし、心理的欺きに無縁な精密兵器などない。兵器はただ単なる破壊装置であるばかりでなく、視覚の装置でもあるのだ」と。

地球の全表面がすっぽりとインターネットに覆われた今日、この状況はさらに加速化し、情報戦争やサイバーテロはほとんど日常と化すにいたつた。新たなメディアやテクノロジーが、力の場すなわち戦場を提供しているのである。とはいえ、これは何も現代に限つた話ではない。程度の差こそあれ、西洋で印刷術が飛躍的な発展を遂げた十五世紀後半から十六世紀においては、この新たなメディアは、相手を威圧し欺くヴァーチャル戦争を飛躍的に加速させた。まさに版画や挿絵という「視覚の装置」を駆使して、イメージによる戦いが繰り広げられたのである。

とりわけ焦点となつたのは、アンチキリストをめぐる闘いである。この世を破壊に導く張本人はいったい誰なのか。ローマ教皇なのか、それともルターやカルヴァンらの改革派なのか。ささまじくもかまびすしいまでのイメージと情報の応酬が、両者のあいだで繰り広げられたのだ。……[中略]……

新しい技術を駆使したイメージ戦術にたけていたのは、どちらかというところ改革側の方である。その一端は、「バビロンの大淫婦」に関連して前の章でも見たとおりだ。だが、それだけではない。ほかでもなくローマ教会こそがアンチキリストだ。その軍刀直入のメッセージがあの手この手で喧伝されたのである。

たとえは、ルーカス・クラナハの工房で制作された『キリストの受難とアンチキリスト』(一五二二年、ロンドン、大英図書館)の挿絵はその早い例である。キリストとアンチキリストを二十六枚の木版画によって対比させたもので、見開きで十三組からなる。キリストの描写は福音書に基づいているが、ここではアンチキリストはつきりとローマ教皇として描かれる。たとえは、キリストが神殿から商人たちを追い払うというエピソードは、ローマ教皇が免罪符を売つた儲けを勘定している場面と並べられる。こうして、現世の富を拒絶したキリストと、金の亡者たるアンチキリストとしての教皇とが、鋭く対比されるのである。その手法は、巧妙にして辛辣である。……[中略]……

もちろん、ローマ教会の側も黙つてはいられない。ルターこそがアンチキリストなのだ、すかさず切り返してくる。たとえは、ハンス・ブローザメル(一五〇〇頃一五四)作とされる木版画『七つの頭をもつ獣としてのマルティン・ルター』(一五二九年、ロンドン、大英図書館)がそれである。ここでルターは『黙示録』に登場する七つの頭をもつ獣、つまり「大淫婦」がその上に乗ったがっていたのと同じ獣と化している。その七つの頭のなかに、博士や聖職者のほかに、ターバンを巻いたムスリムのような不信心者、毒針をもつスズメバチが何匹も髪にまとまっている狂信者、そしてバラバなどがある。「バラバ」というのは、イエスが捕まる代わりに特赦にあずかつて釈放された罪人の名前である。ルターは両手で聖書を開いて、それを読んでいる様子なのだが、いったいどの頭でそれを理解しているのだろうか。このカリカチュアにもまた辛辣な皮肉が込められている。

\*『黙示録』…新約聖書の一書(ヨハネの黙示録)。世界の終末と最後の審判、キリストの再臨と神の国の到来などが象徴的に記されている。  
\*アンチキリスト…世界終末のキリストの再臨の前に出現する、教会を迫害し、世を惑わす偽預言者や異端など。  
\*バビロンの大淫婦…『黙示録』に登場する邪悪を象徴する女。  
\*カリカチュア…風刺画。